
罪

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
罪

【Nコード】
N1292M

【作者名】
はなちよこ

【あらすじ】
智美は屋上にいた。
このまま死ぬことができたなら楽なのに
その時、彼女の前に現れたのは？！
そう思いながら。

なぜ私はあの時、あんなことをしてしまったのだろう。
そうじゃなかったら。
今頃、私は・・・・・・・・。

黒い長い髪が風になびいた。

一步、一步、足を踏み出す。

下を見ると車も人も何もかもがノミのように見えた。
背筋がぞくつとした。

フェンスをギョツとつかんだ。

大きなため息をつく。

「でも・・・・・・・・死ねないもん・・・・・・・・」

私がそう呟いた時だった。

ドアが勢いよく開いた音がしたと思ったら。

ものすごい勢いで後ろに倒れた。

私は何が起こったのか分からなかった。

私の下はコンクリートの地面のはずなのに。

なぜか変な感触がした。

人間・・・・・・・・？！

「キャア！」

私は驚いて起き上がった。

私の下敷きになっていた人がヨロヨロと起き上がった。
見ると、高校生くらいの男の子だった。

その子は私を見るとこう言った。

「自殺なんかするんじゃないねえ！」

その子は肩で息をしながら、そう言った。

私は驚いてその子を見上げた。

そしてこう言った。

「・・・・・・自殺？ 違うよ」

「え?!」

今度は男の子が驚いて目を真ん丸くした。

綺麗な瞳だった。

「自殺するかと思ったの?」

私がそう聞くと、男の子がしゃがみこんで頭を抱えながらこう言った。

「だって三〇分以上もここにいて、何か変な予感がしてたけど、フエンスの方に近づいて行くから、まさか、と思って走ってきたんだ」
「見てたの?」

「休憩中だったから屋上でコーヒー飲んだ。隣のビルなんだ」
そう言って男の子が人差し指で右側の方を指した。

男の子が指さした方を見ると。

ちょうどこのビルの右隣に同じ高さのビルがある。
そのビルの屋上からはこの屋上がよく見える。

「ごめん・・・・・・」

男の子が顔を上げてそう言った。

「うっん。ありがとう」

私がそう言くと男の子が首を傾げた。

男の子が何かを口にしようとした瞬間。

私はそれを遮るようにこう言った。

「私は智美。ちみ あなたは?」

「俺は淳平」

淳平はそう言ってニッコリ笑った。

その笑顔が眩しかった。

「コーヒーおごるよ。驚かせちゃったお詫びに」

私がそう言って立ち上がると淳平も立ち上がって言った。

「ごめん。そろそろ仕事に戻らないと」

「仕事？」

「隣のビルね」

「………高校生くらいかと思ってた」

「それでも二四歳の社会人」

淳平の格好は白いYシャツに青色のネクタイをしていた。

ズボンは濃いグレー。

よく見たら、淳平はスーツを着ていた。

「ごめん」

私がそう言つて少しだけ笑うと。

淳平が言つた。

「今日、暇？」

「ん？ 何も予定はないけど」

「じゃあ、このビルの手前にあるカフェでコーヒー飲もうよ。一六時に」

「分かった。一六時ね」

私がそう言つと淳平は屋上の出入り口のドアに向かって歩き出した。

私に背中をむけたまま一度だけ手を大きく上げた。

ボタン。

扉が閉まる音が響いた。

淳平がいなくなった屋上は静かだった。

下で車を通る音や遠くで電車が走りすぎて行く音が聞こえるだけ。

私はもう一度、下を見た。

そして出入り口のドアに向かって歩き出した。

淳平が言つたカフェはこぢんまりとした店だった。

店内は落ち着いた色で統一されていて

茶色の木の丸いテーブルの上にはピンクの花がガラスのコップに生けてあった。

「一五時五〇分か……」

私は時間を確認すると携帯をカバンにしまった。
カフェオレを注文すると窓際に目をやった。
カップルが楽しそうにお喋りをしていた。

もしかしたら。

淳平は来ないかもしれない。

だって今日会ったばかりだよ。

からかわれただけかもしれない。

でも……。

私が自殺をすることで隣ビルから、わざわざ私を止めに来てくれたんだ。

そんな人が……。

あんな綺麗な目をした人が。

嘘なんかつかない。

正直、来てほしい気持ちと。

このまますっぱかしてほしい気持ちで

何だか複雑な気分だった。

「……不幸になる」

その声にハツとした。

あの声だ。

あの時の。

背筋が凍っていくような感覚がした。

私は立ち上がった。

ダメだ。ここにいちゃいけない。

そう思ってカバンを持った時だった。

「智美ちゃん！ いたいた！」

その声に横を見ると淳平が店に入ってきた。

ニコニコして私の方に歩いてきた。

「急いで仕事終わらせてきた」

そう言った淳平は。

さつき会った時と違って濃いグレーの上着を羽織ってビシッとス
ーツを着こんでいた。

まるで私に「高校生」と言われたのを気にしているかのように。

「どうしたの？」

立ったままの私に淳平が不思議な顔で私を見た。

綺麗な瞳。

「座ろう」

そう言ってニッコリ笑う淳平。

眩しい笑顔。

私には眩しすぎるくらい。

「・・・・・・うん」

私はそう言って椅子に座った。

淳平がホッとしたような笑顔を見せた。

私も淳平に微笑んだ。

今だけは。

今日だけは。

幸せな気分になろう。

それくらい、いいよね・・・・・・。

私と淳平はカフェで沢山お喋りをした。

お互い映画が好きなことや。

最近、読んだ本の話。

淳平の仕事。

私は今フリーターで二〇歳の頃に上京してきたこと。

沢山、話した。

肝心なことは、隠したまま。

言えないまま。

言えるわけではない。

カフェを出て淳平は車で駅まで送ってくれた。
車がロータリーに止まって私がお礼を言っ
て車を降りようとした時だった。

淳平に腕をつかまれた。

淳平の手が、熱い。

そして。

淳平はこう言った。

「俺と付き合ってほしいんだ」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「・・・・・・・・え？」

「こんなこと言うと変だと思われるかもしれないけど」

淳平が私の腕をつかむ手に少し力をいれた。

そして続ける。

「今日、屋上で智美を見た瞬間、運命だと思った」

淳平の顔が真っ赤だった。

真っ直ぐに私を見つめた。

「・・・・・・・・腕、痛いよ」

私がそう言うのと淳平が慌てて手を離れた。

「すぐに返事くれなくてもいいから」

淳平はそう言うのと手帳を一枚破いてポケットに入っていたボール
ペンで何かを書き始めた。

そしてそれを私に差し出した。

私はその紙を受け取った。

「考えてほしい」

淳平はそれだけ言うのと黙りこんだ。

私は再度お礼を言って車から降りた。

振り返ると淳平の車はまだロータリーに止まっていたままだった。

淳平が私を見ていた。

駅のホームで電車を待つ間。

私は淳平のくれた紙を見ていた。

そこには淳平の携帯番号とアドレスが書かれてあった。
普通なら。

喜んで付き合うだろう。

でも私は・・・・・・・・。

冷たい風が吹いた。

私は両腕を手でさすりながら。

ゴミ箱の方へ歩いた。

淳平のくれた紙をゴミ箱の上にかざす。

紙を手から離せない。

捨てたくない。

そう強く思った。

私は紙を胸に当てて両手で抱えこむようにして握りしめた。

淳平が軽い気持ちで告白してきたんじゃないことくらい。

私にも分かった。

伝わってきた。

私もすごく嬉しかった。

でも・・・・・・・・。

力チャ。

聞き慣れた音がしてドアを開ける。

狭いアパート。

これが私の部屋だ。

玄関を上がってすぐにあるスイッチを押した。

パチンという音共に真っ暗だった部屋が明るくなる。

入ってすぐにある小さなキッチンに向かう。

冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出した。

ペットボトルから直接ミネラルウォーターを飲む。

口の周りを手で拭いた。

ため息を一つ、ついた。

目を閉じた。

淳平の顔が浮かんだ。

眩しい笑顔。

私に告白してきた時の真剣な顔。

言おう。

そう思うと目を開けた。

ベッドの上に座ってカバンから携帯を取り出した。

紙を見ながら番号を押していく。

指が震える。

信じてくれなくてもいい。

軽蔑してくれもいい。

気持ち悪いと思われてもいい。

あんなに真剣な顔で想いを伝えてくれた人に。

私の本当のことを伝えたい。

・・・・・・本当の姿を。

呼び出し音が鳴る。

私の胸がドクン、ドクンと大きく鳴る。

五回コールした後。

『はい』

「智美だけど」

『やっぱり！ 智美からかかってくる気がしてたんだ！』

電話の向こうで淳平が明るい声になった。

私はドキドキする胸を押さえて。

小さく深呼吸をする。

『どうしたの？』

淳平が黙ったままの私にそう言った。
不安が混じった声。

「あのね」

そう言った瞬間、目を閉じた。
あいつの姿が瞼から離れない。
もつずっと。

「悪魔っていると思う？」

『・・・・・・え？ 何？』

「いると思う？」

『いや・・・・・・いないと思うけど・・・・・・』

「私ね」

ベッドのシーツをギュツと握る。

「私、悪魔に会ったことあるの」

淳平が笑った。

私は何も言わないので。

淳平がこう聞いてきた。

『・・・・・・本当に？』

「うん」

それは私の１７歳の誕生日。

その日の夜。

私の部屋に悪魔が現れた。

二メートル以上はある身長。

鋭くて赤い目。

大きな口。

ゴツゴツした黒い体。

頭には二本の大きな角が生えていた。

腰をぬかして後ずさりする私に。

悪魔はニヤリと笑ってこう言った。

「お前が上原智美か」

悪魔の低い声が部屋に響いた。

私は体を震わせながら頷いた。

「俺はお前を殺しにきたわけじゃない。むしろ借りを返しにきたんだ」

「……………借り？」

やっと言葉が出た。

私は震える声でそう聞いた。

「ああ。お前の曾じいさんに感謝するんだな」

「曾おじいちゃん……………」

「お前の曾じいさんはな、俺を助けたことがあるんだ」

「……………助けた？」

「俺がまだ悪魔として未熟だった頃にな。ヘマをしたのを助けてくれた」

私が体を震わせて黙ったまま悪魔を見た。

悪魔はニヤツと笑ってこう言った。

「あいつは……………お前の曾じいさんは変わった奴だったよ。

俺の姿が見えるんだからな。まあ、お前にもその血が流れてるんだな」

「借りって……………なに？」

「ああ。簡単に言えば、ケンカに負けて怪我をしたんだ。別の悪魔に足を刺されてな。座りこんでいたら、お前の曾じいさんが俺の傷を手当てしてくれた。曾じいさんは俺を怖がらなかった。なぜだと聞いてみたら、困っている者がいたらどんな生き物だろうと、俺は助ける、と言っていた」

「そうだったんだ……………」

「あいつはもう死んだんだな……………。俺は、あいつに約束したんだ。必ず借りは返すって。そしたら、あいつこう言ったんだ。

借りなんか返さなくていいって」

私はゴクンと唾を飲み込んだ。

悪魔は続ける。

「でも俺としちゃあ借りは返したい。人間に借りを作るのは嫌だったしな。というわけで、あいつの子孫に借りを返そう思ったんだ。と言つても俺が見えなきや意味がない」

「私だけが……見えたのね……あなたの姿が……」

「ああ。俺は長いこと待てない主義でね。お前に俺の姿が見えたら、すぐにでも借りを返そうと思った」

「借りを返すって……一体何をするの？」

私は体の震えが止まらなかった。

悪魔は私の目の前に小さなガラス瓶を差し出した。

その中に透明な液体が入っていた。

「これはな不老不死の薬だ」

悪魔の言葉に私は驚いてその液体を見た。

「……不老不死……」

「これを飲めば、お前はこの体のまま永遠に生きられる」

「この……体……」

「そうだ。今の若い肉体のまま永遠にだ。死ぬことはない。死ぬないんだ」

「殺されても？」

私はそう言つて悪魔の顔を見上げた。

「ああ。銃で撃たれようと、ナイフで刺されようとな。

病気も、事故も怖いものなしだ。もちろん自殺もできない」

「……すごい」

なぜだろう。

私はその頃。

一七歳の誕生日を迎えても嬉しくなくて。
これからどんどん歳をとるのが怖かった。
もちろん死ぬのだって怖い。

まるで悪魔はそんな私の心を見透かしたようにそう言った。
それに。

これは夢なんだと思ってた。

「これ、くれるの？」

私がそう言っていると悪魔はまたニヤリと笑ってこう言った。

「ああ。だが、これをお前が飲むからには、代わりに誰かが死ななければいけない」

「……誰か？」

「嫌いな奴の名前を言ってくれば、そいつが代わりに死ぬ」

私はすぐに頭に浮かんだ。

私の彼氏を奪った。

そして。

学校で私のことをイジめていた同じクラスの女。

「嫌いな奴くらい、いるだろう？」

悪魔の言葉に。

私はこう言った。

「いるよ」

その日。

私は恐る恐る、その液体を飲んだ。

ものすごく苦かった。

でも我慢して全部飲んだ。

飲んでも体に異常はなかった。

次の日の朝。

目が覚めた時、やっぱり夢だったんだ、と思った。

でも。

ふとベッドの脇に目をやって驚いた。
ベッドの脇の小さなテーブルの上にはガラスの小瓶が置いてあった。

その瓶は空だった。

昨夜、悪魔が持ってきた不老不死の薬の入った小瓶。
急いで学校へ行くと。

私をイジめていた子が学校に来ていなかった。
先生が言った。

あの子は死んだ、と。

私は昨夜、悪魔にその子の名前を教えた。

「分かった。そいつは今夜、死ぬ」

悪魔はそう言ってニヤツと笑った。

その子は昨夜、死んだそうだ。

私の身代わりになって。

私は怖くなった。

人を殺したんだ、と思った。

その子の死因は突然死で警察も動かなかった。

まさか警察に出頭する勇気もなくて。

出頭したって信じてくれるわけがない、と思った。

私は二〇歳になってから家を出た。

歳をとらない私を見たら家族が驚くし心配するだろうと思ったからだ。

それにこの町を早く出たかった。

直接的ではないにしろ、私が人を殺した町から。

上京してバイトを始めた。

何をしたいかなんて考えてなかった。

恋愛だつてできない。

歳をとらなくて死なない体。

そんなこと言ったら気味悪がられる。

それに私は人を殺してる。

そんな私に恋愛する資格なんてない。

死のうと思つてナイフで自分の胸を刺したこともある。

沢山の血が流れた。

意識を失う瞬間。

ああ、死ねるんだ、と思つた。

でも。

しばらくして目が覚めた。

私の胸に刺さつていたはずのナイフは私の横に転がっていた。

血がついていない。

胸に傷もない。

痛みもない。

あの時。

悪魔が私の部屋に来た夜。

悪魔が帰り際にこう言つたのを思い出した。

「一つ、忠告しといてやる」

「なに？」

「それを飲んでも幸せにはなれない。不幸になる」

意味が分からなかった。

不老不死の体になれるのに。

なんで不幸になるんだろう。

嫌いな子も死ぬのに。

私は軽く考え過ぎていた。

夢だと思つていたせいもあるけど。

それにしては、甘く見ていたんだ。

電話の向こうで淳平が黙って話を聞いていた。
私は震える声で言った。

「ね、私、最悪な人間でしょ」
そう言った途端。

電話がブツツと切れた。

私は携帯を持ったまま茫然としていた。

「やっぱり……」

そう言った私の頬に涙がつたう。

枕に顔を埋めて泣いた。

ほらね。

本当のことを話したら。

相手は離れていくだけ。

それが。

人を殺して不老不死になった私への罰だ。
でもまだそれは、軽い罰なんだろう。

ピンポーン。

チャイムの音が部屋に響いた。

私は無視して布団をかぶった。

ピンポーン。

ピンポーン。

チャイムの音が止んだ。

そして。

ドンドン。

ドアを叩く音が聞こえた。

「智美！ いるんだろ？ 開けるよ！」

その声に自分の耳を疑った。

「……………淳平」

私はそう呟いて慌ててドアを開けた。

淳平が立っていた。

そして私を抱きしめた。

あたたかい。

こんな感覚、どれくらいぶりだろう。

「あの話……………信じてくれたの？」

私がそう言うのと淳平は言った。

「智美、いくつ？」

「……………25歳」

「一こ上か。確かに見えない」

淳平はそう言って笑った。

「……………うん」

「まあ、俺も幼く見られるしさ」

「私、人を殺したのよ……………」

「もう苦しまなくていいから！」

淳平は私をさっきより強く抱きしめてこう言った。

「智美は……………十分苦しんだろ？ 辛かっただろ？」

「……………うん」

「だからと言って消える罪じゃない。でも」

淳平が私の服の裾をギュツと握る。

「俺は智美と一緒に生きたい。俺も智美の罪と一緒に背負うから」

鋭い目を、丸くさせた。

驚いたような顔で私を見た。

腕から黒い液体が流れていた。

私は持っていたハンカチを大きな腕の傷口に当てた。

ハンカチが見る見る内に黒く染まった。

「……………二度も会うとは思わなかった」

悪魔がそう言ってニヤツと笑う。
でもその顔は痛みでひきつっていた。

「また別の悪魔にやられたのね。ケンカに弱いのね」

「ああ……昔からだ」

私はカバンから包帯を取り出して悪魔の腕の傷口をきつくしばった。

「探したのよ」

私がそう言うと悪魔が言った。

「初めて会った時から……六〇年くらい経ったか」
「七〇年よ」

「そうか。本当に初めて会った頃と全く変わらないな」

「……ええ。これでも年齢は八七歳」

「化け物みたいだな」

「あなたに言われたくないわね」

私はそう言うと空を見上げた。

真っ暗な空だ。

淳平の顔が浮かぶ。

眩しい笑顔が。

今まで本当に幸せだった。

心の底から笑えた。

毎日がキラキラと輝いていた。

それは。

隣に淳平がいたから。

今でも淳平が昔、言った言葉を思い出す。

「俺は智美と一緒に生きたい。俺も智美の罪と一緒に背負うから」

あの時のことは今でもハッキリと覚えている。

まるで昨日のことのように。

悪魔の腕から出る黒い血が少なくなってきた。

悪魔はニヤツと笑った。

初めて会った、あの時のように。

そして私を見てこう言った。

「借りは返さないとな。望みはなんだ？」

私は悪魔を見て微笑んでこう言った。

「殺してほしいの」

悪魔の目がまた丸くなった。

「淳平は一年前に死んだ。だから私はもう生きる意味がないの」

淳平のいない世界は。

私にとっては地獄。

淳平のいる天国へ行きたいなんて贅沢は言わない。
だけど。

淳平がいないこの世界で生きられない。

淳平がいないなら生きている意味がない。

「あなたなら、私のことを殺せるでしょ？」

私の言葉に悪魔は頷いた。

薄れゆく意識の中で。

真っ暗だった空から突然、眩しい光が見えた。

淳平の笑顔が見えた気がした。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1292m/>

罪

2010年10月8日14時36分発行